

使徒言行録19章 21節-40節

『福音に聞き、福音に生きる』

富山県で牧師をしていた方から聞いた話ですが、明治の半ば頃、実際に起こったことなのですが、富山県のある町で仏壇や仏具を作っている人たちと、遊郭の経営者が教会に殴り込みに来たのです。その町は特に仏壇仏具の製造が盛んなところで、その人たちにとってキリスト教の伝道は自分たちの仕事への直接の妨害、と感じられたのでしょう。その殴り込みに遊郭の経営者も加わっていた、ということが興味深いところです。明治以来日本においてキリスト教はいわゆる廃娼運動の担い手であり、キリストの福音が宣べ伝えられるところ、遊郭通いを罪として退ける風潮が生じていった。いや、そもそも遊郭通いが罪という観念と結びつくことはなかったわけですからそのような考え方捉え方をキリスト教が齎した、そのことに対して、遊郭の経営者たちが憤りを感じて殴り込みに来た、というのです。

キリストの福音が宣べ伝えられることによって、ある種の仕事をしている人々との間に衝突が起こる。今朝朗読された聖書箇所でも報告されているのはそういうことであり、富山での事件と、規模も状況ももちろん違いますが、根本のところでは同質の事件です。パウロがエフェソの町に滞在していた時のことです。アルテミスの神殿の模型を作って、それを売りさばき儲かっていた銀細工師、職人たちがいました。アルテミスというのはギリシア神話に出てくる女神で、地母神としてあがめられ、胸には肥沃豊穡を象徴する18の乳房がついているちょっとグロテスクな女神でした。このアルテミスを祭る神殿というのが、当時の七不思議に数えられているほどの壮麗な建物で、間口43メートル、奥行き103メートル、合計百本の大理石の柱で屋根が支えられていたという巨大建造物でした。この巨大な神殿の模型を作って商売していた人たちがいたというのですから、奈良に修学旅行で行ったとき、奈良の大仏殿のミニチュアを買ったものとしては、昔も今も人間のやることは変わらない、という面もある、と思わされるのです。

この模型を作る元締めの人である銀細工師のデメトリオなる人物が、職人たちや仲間を集めてこう呼びかけたのです。「諸君、我々はこの仕事で商売しもうけている。しかるに、パウロという輩は『手で造ったものなどは神ではない』と言ってエフェソばかりでなくアジア州のほとんど全地域で、多くの人を説き伏せ、たぶらかしている。これは我々の商売に対する妨害だ。それだけでなく、

偉大な女神アルテミスの神殿に対する冒瀆だ。女神アルテミスの御威光が失われてしまう。」デメトリオはこうって訴えました。

パウロはかつてアテネの町でこう語りました。「世界とその中の万物とを作られた神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりませんまた何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。」

パウロはエフェソの町でも同じようなことを語ったでしょう。そしてデメトリオは、ある意味とても敏感にパウロの言葉に反応したのです。それが彼の要約したパウロの言葉「手で造ったものなどは神ではない」という一言によく現れているのです。デメトリオの言葉をきっかけに銀細工師や職人、それにエフェソの町の人々は怒りを爆発させました。人々は口々に「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と叫び始め、町中が混乱に陥ったというのです。

大勢の人々が群がり、次第に群衆の波ができ、混乱していく。パウロの同行者だった者が捕らえられ、連行され、人々は野外劇場になだれ込んでいきましました。パウロもその劇場に入っていこうとしましたが、弟子たちがそれを引き留め、そうさせませんでした。

なだれ込んでいった群衆の中には、銀細工師や職人たちはもちろん、パウロの言葉に怒りを覚えたアルテミスの女神を崇めていたエフェソの町の人々が多くいたでしょう。しかしそれだけでなく、やじ馬も、さらには巻き込まれてしまった人たちもいたでしょう。集会は混乱し、なぜここに集まっているのかわからない人たちもたくさんいました。

このような状態でパウロが劇場に入れば、群衆が暴徒と化す恐れもあり、パウロの友人でアジア州の高官たちがパウロが劇場に入らないようと頼んだのでした。

こうした騒然とした中でユダヤ人たちに押し出されて皆の前に立ったアレクサンドロという男が、群衆に語りはじめます。なぜこの人物がみなの前で語ろうとしたのかといえば、エフェソの人々からすれば、そもそも唯一なる神ヤハウェを信じるユダヤ教徒も、パウロも、皆同じ。ギリシアの神々を信じる信仰からすれば、自分たちに敵対する者だ、という思いがあり、アレクサンドロはそれに対して弁明しようとしたのでしょう。ところが群衆は彼がユダヤ人だとわかると、一斉に「エフェソ人のアルテミスは偉い方」とシュプレヒコールを上げ、叫び続けたのです。

群衆は興奮状態に陥り、野外劇場はまさに人々の叫び声が響き渡る。

群衆の動向を見つめ収拾に乗り出した町の書記官が登場し、人々をなだめて、

こう語るのです。エフェソの町がずっと女神アルテミスの守護役だった、それは周知のことだ。だから、無謀なことはしないでほしい。あなたがたが連行してきた人たちは神殿も汚していないし、女神を冒瀆したわけでもない。もし、苦情があるなら、裁判にかけてもいいし、地方総督に訴えるのもいい。これ以上の要求は正規の集会にかけるべきものだ。今日の事件は騒乱罪に問われるおそれもある。そうなったら私は弁護することはできない。書記官のこの発言によって人々は解散させられ、ひとまずこの騒動は収まったのです。これが事件の顛末です。

それにしても使徒言行録の著者ルカはなぜこれほど丁寧にこの騒動の顛末をここに書き記したのでしょうか。大変に長くこまかい記述です。ルカは、イエス・キリストの福音を書き記し、初代教会の歩みを書き記しながら、それが当時の社会の中で、ローマの法律から見て、決して違法なものではなく、いたずらに世の中に騒ぎを起こしているものではないのだ、ということも伝えたかった。当時の世界の中心であるローマ帝国に向かって、キリスト教の弁明をする、という視点がありました。ですから、こうした騒動が起こった顛末を詳しく書くことで、イエス・キリストの福音伝道というものがいたずらに騒乱を起こしているのではないのだ、ということを語っているのです。と同時に、もう一方で全く矛盾するともいえるのですが、キリストの福音が語られていくところ、激突が起こる、ということもルカは語っているのです。キリストの福音が語られていく中で、アルテミスの女神で商売をしているものはもとより、人間の手で造られた神殿には住まわれない神、という言葉によって震わされていく人々がいたことを告げているのです。

事の発端は商売人たちの自分たちの利益が損なわれる、ということでした。だがその背後には、「手で造った神」と「イエス・キリストの神」とのぶつかりがあるのです。キリストの福音が語られる、そこで人間の手になる神々とは違う神が語られるのです。「人間の手になる神」とは人間の延長線上にある神、ということです。人間の願望や欲望を実現するべく、つくられた神。人間が努力し、人間の信念の力で引き寄せていく神。しかし「イエス・キリストの神」は人間の延長線上にはない神。わたしたちの願望や欲望を実現するための神ではない神。

「イエス・キリストの神」は、わたしたちを創造された天地の造り主。わたしたちの努力や、信念の力で引き寄せられる神ではなく、神自らがわたしたちに近づき、語りかけ、わたしたちと共にあり続ける下さる神。

この両者はまったく違う。違うと言えば、二つの神があるようですが、そう

ではない。「人間の手になる神」とは虚像なのです。虚なのです。わたしたち人間の何かの投影なのです。偶像とはわたしたちの中にあるものの投影なのです。従って偶像の神はわたしたちが作り出した虚としての神なのです。

エフェソの町の人だけでない。アテネの町の人、コリントの町の人たちも、「イエス・キリストの神」が語られることで、何かが揺さぶられ始めるのです。それはギリシアの神々のように、たくさんいる神々の一つとしてイエス・キリストの神がいる、ということはまるで違うことです。異質なのです。女神アルテミスとは異質なのです。「人間の手になる神」が「イエス・キリストの神」によって震われるということです。何がそこで震わされているのかと言えば、それは人間の生きることの根本的な態度のことなのです。

人間が自分の願望、欲望、意思、信念、そうしたものに従って生きるのか、つまり自分に従って生きるのか、自分ではない、神に従って生きるか、その根本的な態度こそが問われていくのです。

イエス・キリストの神が語られる、そこで人は大きな問いかけの前に立つのです。問いかけの前に立つのです。何に従って生きるのか、と。エフェソの町の人々が福音に聞いて、直ちに福音に生きるようになったわけではない。人々はまだ女神アルテミスを崇めていたでしょう。キリストの福音をばかばかしい、と感じた人もたくさんいたでしょう。しかし福音が語られることによって人は生きる根本的な態度という大きな問いかけの前に揺さぶられていくのです。

翻って、今日という時代は、使徒言行録の時代とはまた違った困難の中にあります。神から遠く離れて人々は生きています。神はもういない、と思っている人々もたくさんいる。だが女神アルテミスは、形を変えて、姿を変えて、人々の中に生きている。虚の神々として。大事なことは、その人たちをいかに説得するかというようなことではなく、この時代の中で、社会の中で、キリストの福音を宣べ伝え続けていくこと、証しつづけていくこと。福音に聞き、福音に生きること、神に従って生きるという根本的な態度を生きることなのです。